



発行 第 72 号
 平成 25 年 6 月 24 日 (月)
 いわき市総合教育センター
 いわき市平字堂根町 1-4
 0246(22)3705

共 視 論

図画工作・美術教育について、学習指導要領では鑑賞活動の一層の重視が指摘される中で、10年ほど前から「対話型鑑賞」という鑑賞の方法が広く知られるようになってきた。一つの作品を前に、学芸員や教師側から一方的に作品解説することなく、鑑賞者一人一人が、互いの感想を感じたままに自由に意見を出し合うという手法である。そこには、受動的ではなく能動的な行為としての本質的な「鑑賞」のあり方を大切にする姿勢が見てとれる。上から下への一方向的な縦系列の動きではなく、相互に行き来する横系列の動きである。こうした人とのかかわり方は、近年注目されるようになってきた授業における子どもの「学び合い」の姿であったり、校内研修における研究協議のあり方などと重なってくる。

ところで、「共視論」という言葉がある。(精神分析医の北山修氏が進めてきた研究で知られているが、氏は元九州大大学院教授であり、「戦争を知らない子どもたち」や「風」といった名曲の作詞者でもある)

「共視」とは対象を共に眺めることであり、北山氏は浮世絵に描かれた数多くの母子像を基に、母子が共に何かを見るという構図から愛情に満ちた親子の関係や日本的な「場」の文化(親が子を背負う行為は西欧などでは見られない事例など)を見だしていく。同じ対象を共に眺める行為には、同じ場で同じく行動を共有するという愛情表現の基本的な姿があり、個別化された現代社会においては、対象に同時に想いを向けることの人間的な行為の尊さを思わずにはいられない。

対象となる何かを個々の視点から共に見合う(語り合う)場を持つということ、そして、それぞれに感じたことや考えたことを自身の言葉や身体などを使って表出(表現)し合うという行為には“コミュニケーション”という言葉そのものもつ、互いの存在や想いを尊重しつつ「伝え合い、共有する」という人間的なかわりとしての大切な意味が含まれているように思う。様々な研修における研究協議の場などにおいては、同じ方向を向きながらも自分の考えをもって互いに意見を交換し合い、協同的に学び合う中で課題のよりよい解決を図っていききたいものである。

参考:「共視論」北山修編著(講談社選書メチエ344)



受講者の感想から

「教育相談係」から

毎年、5月の連休明けから不登校関係の相談件数が多くなりますが、今年度もその傾向が続いています。5月の相談内容では、相談件数の4割超が不登校に関わる相談でした。

その中でも、中1と中3の生徒の不登校傾向が目立ちます。

以前から中1ギャップの問題が指摘されてはいましたが、あまりにも学校とのつながりを断ってしまう時期が早過ぎます。

また、中3の不登校状態の生徒の中には、一大行事の修学旅行にも参加できなかったという子もいます。

しかし、親身に個々の生徒に寄り添えば、本来持っているエネルギーを再燃でき、前向きになれる子も出て来ます。



生徒指導主事研修①から

初めて生徒指導主事の担当になられた方を対象とした講座でした。校内の役割や、どのように積極的な生徒指導を進めたらよいかを研修しました。

協議・講義内容から

「生徒指導主事の基本的な行動例」7のポイント紹介

- 1 多方面からの情報収集
→ 誰とでも、情報交換できる雰囲気をつくる。
- 2 情報の集約と、課題の明確化
→ 適切な指導・対応ができるように、必要に応じて追加の情報収集もする。
- 3 管理職への状況の報告・連絡・相談
→ 客観的に!速やかに!定期的に行う。
- 4 取組計画の策定と、方針の具体化
→ 説明責任に耐えうるものか検討する。
- 5 取組方法の提案と、周知徹底
→ 具体的な説明をし、職員に意見を求める。
- 6 役割の連携と、相互補完
→ 教頭・学年主任・学級担任等と連携する。
- 7 取組の点検・検証と、振り返り
→ 随時、取組を見直し、微調整する。



☆ 合意形成し、指導・対応するなど日頃からのコミュニケーションが生徒指導主事の「調整力」の発揮には欠かせません。

初めての生徒指導担当ということもあり、不安なことが多かったが、一人でするのではなく、中心になり、学校全体で取り組むことの大切さ、事後対応より、事前指導による未然防止の必要性がよく分かった。